

<p>上演 9</p> <p>2022年8月 1日(日) 4校目</p> <p>関東 ブロック (栃木県)</p> <p>栃木県立 栃木 高等学校</p> <p>「GEKKO」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(奈良県) 奈良県立橿原高等学校</p> <p>大野 花菜</p>
--	---

男子校ならではの雰囲気伝わってくるパワフルな劇であった。観客が男子校の生物部を覗き見しているような感覚にさせてくれ、60 分間ずっと楽しませてくれる、満足させてくれるような劇だった。生物部員の個性溢れる人物像とそれぞれが愛する生き物があわさって、独特の世界観が作り出されていた。脚本、題材、生物学の話、どれもしっかりと研究されており、細かく説明しているのにも関わらず、それが単調な説明に終わらないところが秀逸に感じた、という意見が講評委員から多く出た。

男だけの、ほとんどが女子と関わりの無い生物部員。緊急事態宣言で学校の体験入学ができない中学生のために部活動紹介ビデオを撮影していた。ミツキからのハガキに興奮する男子の姿から、舞台には直接登場しないミツキの可憐さを観ているものに創造させていた。

ラストシーン。モリヤ達生物部9人が後ろに背中を向けた上から紙吹雪を降らせた演出は雪が恋しかったミツキのためにモリヤが起こした奇跡と感じた講評委員もいれば、ミツキが空からモリヤと心を繋ぎたい想いを表現していたのではないかと感じた講評委員もいて、議論が盛り上がった。

「おっばい大好き!」。この言葉を最初にシジミの口から聞いたとき、客席中から笑いが起こっていた。だが、モリヤがこれをミツキへの想いを乗せて連呼したシーンでは、会場にいる誰も笑うことはなかった。そのシーンから、「おっばい大好き」と「逃げちゃだめだ」の二つが重なって聞こえたという講評委員もいた。普通ならば絶対に重なることのないこの2つのセリフ。それが重なって聞こえたのはモリヤのミツキへの想いの強さの表れだろうと感じさせられた。

「神様なんてどうでもいい、みんな不謹慎なことしよっぜ!」。この神様というのは人としてのルールであったのだろう。緊急事態宣言が出ていても沖縄へ行くモリヤの背中を押す根津部長、ルールを破ったがこれが彼らの正解なのだと感じた。

変形菌は子実体になると命がそこで終わってしまう。だがそれは孢子を作って次の世代に命をつなぐ準備をするためだ。ミツキの命は 17 歳という若さで終わったが、「自分たちの心に生きている」、そんな奇跡のようなことを男子生物部の話から私たちは受け取った。